

牛木商事の 《第14号》 かってにかわらばん

11月15日

七五三の祝いは、江戸期、元禄の頃に始まった行事で、3歳は男女両方、5歳は男の子、七歳は女の子を、それぞれ成長の区切りとして感謝しお祝いする行事です。



分かれているのにはそれぞれ意味があります。

3歳は男女共に「髪置（かみおき）の祝い」と言います。昔は、3歳までは男女共に髪の毛を伸ばさないでそり続けていたそうです。理由は頭髪から病気が入ると考えられていたとのことで、子どもが病気にならないため、3歳まで元気に成長したら、そこから髪の毛を伸ばす区切りとしたそうです。

5歳は「袴着（はかまぎ）のお祝い」と言います。これは5歳の男の子が初めて袴を着るお祝いをするものです。七五三といえば11月15日ですが、これは徳川5代将軍徳川綱吉の息子、徳松君の袴着のお祝いをこの日に行ったことからと伝えられています。

七歳は「帯解（おびとき）のお祝い」と言います。これは女の子が7歳になった年のお祝いで、それまでの紐付きの着物に代わって、本仕立ての着物と丸帯という大人の装いへ、この時から変えたためです。

昔はそれぞれ「数え年」で七五三をお祝いしていましたが、現在は数えでお祝いする場合と実年齢でお祝いする場合と両方のお祝いの仕方があるようです。



千歳飴も、やはり元禄の頃に浅草で売り出されたのが始まりとされており、子の長寿の願いを込めて細く長く、また縁起が良いとされる紅白になっています。

袋も鶴亀や松竹梅などの縁起の良い絵が描かれています。

千歳飴は子供に食べさせると共に、内祝いとして親戚・近隣などに贈り、福のお裾分けをしたりもするそうです。